





風邪癒えむつまづきて鳴る子の樂器  
 綿蟲に顔の力を應と抜く  
 もてあそぶ獨樂からは何も生れぬ  
 恍惚と秘密あり遠き向日葵あり  
 木枯の先へ先へと心研ぐ

『白面』

1 1 1  
 1 1 1  
 2 1 1  
 8 7 8  
 1 1 1  
 2 7 7  
 8 8 7

「鷹」創刊

海藻を食ひ太陽へ汗さゝぐ  
 胸の底わくから葉たまるためておく  
 夜霧さむし海豹あざらしなどは灯なく寢む  
 春昼や男の眼もて妻を見る  
 心づけばいつもひとりやはこべ萌ゆ  
 母みづから死後のこといふ夜の柚子  
 春雷や土の香幹に沿ひのぼる  
 椿ひらく海で嗚らせし父の声  
 直視あるのみ夏は眞赤な花愛し  
 愛足りし如く蟹追ふはだしの妻  
 泣きぎまの昔はよよと鶏頭花  
 少年に好色の蝶すべり墜つ  
 口笛ひゆうとゴツホ死にたるは夏か  
 旅もて飾る母の晩年いわし雲  
 破蓮のうしろの声に近寄らず  
 枯山に鳥突きあたる夢の後  
 掌中に乳房あるごと春雷す  
 髪刈つて晩夏さとき身黄昏へ  
 逢ふまでの言葉ひとつや鰯雲  
 謎もなし穴掘れば穴に雪降り  
 蜺汁誰の嗚咽か聞えたる

『狩人』

1 1 1  
 7 7 7  
 1 1 1  
 0 0 0  
 1 1 1  
 6 6 6  
 9 8 8  
 1 1 1  
 5 5 5  
 6 6 6  
 1 1 1  
 5 5 5  
 6 6 6  
 1 1 1  
 5 5 5  
 3 0 8  
 1 1 1  
 4 4 4  
 8 7 6  
 1 1 1  
 4 4 4  
 6 6 6  
 1 1 1  
 4 4 4  
 5 9 3  
 1 1 1  
 3 3 3  
 1 0 0  
 1 1 1  
 3 3 3  
 0 0 0



なぜかこの寒暮を父と二人きり  
うすらひは深山へかへる花の如  
百本の桔梗束ねしゆめうつゝ  
火事跡に海見えみたるあはれかな  
卯月浪父の老いざま見ておくぞ  
大風のたましひぬけの椿百  
鯉老いて真中を行く秋の暮  
父に金遣りたる祭過ぎにけり  
夕焼や蟹は月夜に生むといふ  
大寒やわが慾をわがさみしめり  
しだれつゝこの世の花と咲きにけり  
家にあれば我恙なし秋の暮  
いづかたも水の春とて寝足りたる  
降る雪に汝が身想ふを許されよ  
雛の間にねむる蒲團を竝べけり  
麗らぞとおもひ淋しと朴に寄る  
夕ぐれのづかづかと來し春の家  
人戀うてをれば世に古る櫻かな  
はくれんの散るやをみなを知りしごと  
美しきことのしづかに初蝶來  
大いなる憂ひのごとく干潟あり  
月初はなのけふは遊ぶ日藤若葉  
顔出來て眉まだできず船遊び  
訪ひくれしひとの情や鴨足草  
黒揚羽晝寢のわれの夢奪とりに  
わが妻の膺乳房もう夏である  
その頃の戀句かなしき白地かな

『一個』

2  
7 7 7 7 7 6 6 6 6 5 5 4 4 3 2 2 2 2 1 1 1 1 0 0 0  
5 5 4 4 3 8 3 2 2 8 7 1 9 7 2 3 5 7 7 3 0 4 1 0 8 7

夏山の絞り絞りし夕日あり

萩に花つけば師の忌は近づくよ

胸に来てみちのくのこのてんと蟲

白玉や老いながらへしうすなみだ

秋櫻子忌をひとり群青忌と稱ぶなり

華巖より那智へ行くべし群青忌

師の忌過ぎわが忌近づく濃あぢさゐ

浮巢見て歸れば父が來てゐたり

蠅叩此處になければ何處にもなし

腹の蟲玉蟲色にあるべかり

星飛んで木槿も花のをはり頃

忝な土用蜆の大き粒

死ぬほどの位もなく早かな

蓮といふ泥中でいぢゆうを出て淡きもの

大股に歩く機嫌や葛の花

こち向いて宗祇蝻螂とぞ言はめ

物音は一個にひとつ秋はじめ

芋の秋湧いて泪のふたみつぶ

君もまた長子の愁ひ蚯蚓鳴く

霧の丘ひとの生死しやうじにうすくあり

鳴るたびに秋の風鈴とぞ思ふ

知らぬこと知らぬと言ひぬ芋の秋

白萩やわたくし事の憑き落ちて

眞暗な祭の村を通りけり

しぐるゝや吾子が我呼ぶお父さん

柿蜜柑夜ふけて色のかよひ合ふ

干蒲團病む日來るとも思はれず

2  
7  
7

2  
8  
4

2  
8  
4

2  
8  
6

2  
8  
6

2  
8  
7

2  
8  
7

2  
8  
8

2  
9  
1

2  
9  
2

2  
9  
3

2  
9  
3

2  
9  
4

2  
9  
6

2  
9  
7

2  
9  
9

2  
9  
9

3  
0  
3

3  
0  
0

3  
0  
4

3  
0  
5

3  
0  
7

3  
0  
8

3  
1  
5

3  
2  
1

3  
2  
2

3  
2  
3

干蒲團病む刻待ちてゐる如し  
 干蒲團男の子がなくてふくらめり  
 山茶花やひとの譽をやゝ妬み  
 柗の花最小をこゝろざす  
 送り出て師走顔なる真砂女かな  
 落葉焚少年のわれうしろより  
 おほかたはふるさとを捨て年忘れ

悼揚田蒼生

柗の花の月夜の消えまじく  
 冬蝶の息ほど世をば捨て心  
 柚子湯して沸々のこゑ聞くべかり  
 寒ければ君來るわれの憶ひ函  
 年惜しむひとりあるきを林まで  
 下仁田の葱を庖丁始かな  
 初曆真紅をもつて始まりぬ  
 冬草を踏むたのしさと心づく  
 空見るは忘我にあらず寒椿  
 母見舞ふこともこゝろに雪籠  
 ふるさとの海は鳴る海蓬餅  
 露の臺子育ての悔いさゝかは  
 水仙やたそがれは海おもふ性  
 あまり寒し花を買はむと妻誘ふ  
 目刺ほどさみしくはなし愉しくも  
 納雛鬨に一寸置かれけり  
 わが捨てし望みの數や西行忌  
 大風の窓から消えし干蒲團  
 一人を珠としおもふ春渚

『去來の花』

3  
 7 6 6 6 5 5 5 5 5 5 4 4 4 4 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2  
 1 9 9 6 9 8 7 7 6 5 4 7 7 0 9 8 7 4 2 2 0 9 7 4

|                                    |   |
|------------------------------------|---|
| 卒業の吾子の矢絰飛ぶごとく                      | 3 |
| 花種の袋二三度振つて裂く                       | 3 |
| これよりは花の十日ぞ心せよ                      | 3 |
| ゆきやなぎ子ゆゑの愁永きかな                     | 3 |
| 爲すことはなせり椿の滅多咲                      | 3 |
| 木の芽和墓はいづこと決めかねて                    | 3 |
| ラブホテルなども眺めや鯉幟                      | 3 |
| 藤の虻ときどき空を流れけり                      | 3 |
| 土佐遠し土佐の檣の花戀し                       | 3 |
| 去る者は追はぬこころの端居かな                    | 3 |
| 病葉のごとくに思ひひるがへる                     | 4 |
| 子規ほどの根気はあらず白團扇                     | 4 |
| 花葵 <small>とこしころ</small> 銳心のふとさみしけれ | 4 |
| 積みし書のはたと崩るゝ大暑かな                    | 4 |
| 蛇の首唳々とゆく荒野かな                       | 4 |
| 黒はわが今生の色秋の風                        | 4 |
| 心あての人は居らざる月見かな                     | 4 |
| 秋晴やいのちをかるく家の中                      | 4 |
| 紅葉山たたりたりと人歸る                       | 4 |
| 戦争が過ぎ風が過ぎにけり                       | 4 |
| 泣かぬ子が泣く子離るゝお講風                     | 4 |
| うつくしき昨日は過ぎてみやこ鳥                    | 4 |
| 吻ふために乳房はありぬ冬ぬくし                    | 4 |
| 來る人の來る時過ぎぬ枇杷の花                     | 4 |
| 強情を以て今年を終るなり                       | 4 |
| 人の死が通りすみれに色加ふ                      | 4 |
| 慕情もて仰ぎし頃の櫂の芽                       | 4 |

『黒』

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 |
| 7 | 7 | 5 | 5 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 0 | 0 | 8 | 8 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 |
| 9 | 4 | 2 | 0 | 9 | 8 | 5 | 5 | 3 | 7 | 1 | 7 | 4 | 3 | 5 | 4 | 5 | 1 | 1 | 7 | 7 | 2 | 2 | 2 |



ひと揺れの地震なみに持ちたる蠅叩  
眞青な中より實梅落ちにけり  
てにをはの泣いてゐる句や夜の秋  
はつあきのあはきみどりの蚊を打てり  
鷺草を愛するころは年老いし  
いぼむしり夜風に乗つて來てくれし  
露の玉八方の威を拒みをり  
ほそりゆくいのち見えけり秋の風  
母見舞ふ心となりぬ蓼の花  
病む母へ行く秋蝶のうしろから  
秋の風病母の見たる虚空かな  
草の花しまらく母を忘れむか  
犬の貌して犬通る秋の暮  
人の死を待つ冷たさにつゞれさせ  
決めてをり月見の芒探るところ  
ひむがしの眺めわろくて居待かな  
烏瓜提げし女の夜叉思ふ  
蓑蟲が鳴いて昔のわれを呼ぶ  
かりがねや生死はいつも湯が滾たぎり  
鴨の陣ときをり鯿を放ちけり  
秋風や書けば見えくるものの綾  
煮凝りのふるるふるると箸逃げて  
元日や風とほりゆく草の形なり  
通夜の座のばらつきそめし寒さかな  
寒の凧死は白骨ひやにほかならず  
冬帽子山河みやに禮をなす心

5  
5  
5 4 3 2 0 9 7 7 1 0 0 7 6 4 4 2 2 1 9 7 6 4 3 1



高知

雨合羽をんな遍路を繭となす  
 山川の凡景にして百合ひらく  
 黄菅原霧は粒とも流れとも  
 七五三水の桑名の橋わたる  
 湯豆腐や死後に褒められようと思ふ  
 水母にもなりたく人も捨てがたく  
 秋風のうしろへまはれしじみ蝶  
 大櫂何も叫ばず芽吹きけり  
 おのが座におのれ坐りぬ西行忌  
 面白くなりさう蜂の飛ぶけふは  
 朝顔蒔く平凡といふかくれみの  
 ゆくゆくはわが名も消えて春の暮  
 蝸や死までの扉いくつある  
 生たぬし春の畑のつむじ風  
 忘れ潮いそぎんちやくも夢を見る  
 旅にして蛇見し時間ふくらめる  
 ひぐらしの方へ行かうといつも思ふ  
 二日経てももの見えたり実むらさき  
 枯といふ絶対を待つ雑木山  
 葛飾や一弟子われに雁わたる  
 鯛焼と弓張月と感じ合ふ  
 初夢のわが身何千尺墜ちし  
 定住の意となりし双葉かな  
 風鈴のひつきりなしも困るなり  
 瑠璃蜥蜴さみしからずや息合はそ  
 闊歩して詩人にならうねこじやらし

『神楽』

5 9 7  
 5 9 7  
 5 9 9  
 6 0 1  
 6 0 3  
 6 0 9  
 6 0 9  
 6 1 1  
 6 1 2  
 6 1 2  
 6 1 1  
 6 1 1  
 6 1 2  
 6 1 2  
 6 1 3  
 6 1 3  
 6 1 3  
 6 1 4  
 6 1 4  
 6 2 0  
 6 2 0  
 6 2 2  
 6 2 2  
 6 2 4  
 6 2 5  
 6 2 5  
 6 2 5  
 6 2 5  
 6 2 6  
 6 2 7  
 6 2 9  
 6 2 9  
 6 3 1

耳と鼻かよふさみしき夜の秋  
梟が啼けば荒野へ還るわれ  
冬の蜂死んで見せうと死ににけり  
あかつきに雪降りし山神還る  
大遊びせん七十の初御空  
日本に松と縄あり初詣  
二日雀三日雀と来てくれし  
木枯に貌ありとせば三角か  
うすらひにきぬいと切れしほどの音  
更衣大方の恥忘じけり  
老人は大言壮語すべし夏  
あめんぼと雨とあめんぼと雨と  
死蟬をときをり落し蟬しぐれ  
団栗を拾ひ山へは褒言葉  
何欲といふのか木菟になりたしよ  
さがみ野の路傍のものを年の花  
亡き師ともたたかふこころ寒の入  
天山の夕空も見ず鷹老いぬ  
春の鹿幻を見て立ちにけり  
蝸牛あぢさゐいろを夢見るか  
羊千匹ちちろ一匹夜更けたり  
毛糸帽さて前後なし左右なし  
冬蝶のいのちふたたびみたび舞ふ  
冬晴やお蔭様にて無位無官  
春の草孤独がわれを鍛へしよ  
ひとりこそ自在や花の蕊に虻  
さみしいか淋しくはなし地虫出づ  
柏餅よその男の子を羨まず

『てんてん』

6  
6 6 5  
0 9 9 8 2 2 2 0 7 6 3 2 2 2 9 8 7 4 4 4 4 4 4 4 4

これ見よと蠅虎の子が跳べり  
走り出て蜥蜴の子まだ生乾き  
こめかみに風ひびかふを秋思とも  
考へてをらぬまなざし秋の昼  
うしろからうむを言はせず秋の暮  
永遠は刹那のつづき返り花  
消えかかる身を白魚は寄せ合へり  
そのくらゐ考へてをる目刺食ふ  
暑けれど佳き世ならねど生きようぞ  
辞書の上ががんばそよろそよろかな  
日和見の真骨頂のねこじやらし  
蟪蛄もこゑ出せば死に易からむ  
家にゐて昨日とおなじ秋の暮  
雪の夜のしづかな檻の中にをり  
時間からこぼれて冬のしじみ蝶  
寒晴や未だ弔意の文字なさず  
つちふるや嫌な奴との生きくらべ  
履歴から恋は脱落目借どき  
春曙我となるまでわれ想ふ  
春の暮死んでから読む本探す  
土筆食べ土竜のこゑも聞きたしよ  
下萌にふだんの虚子を想ふかな  
虚子忌まで花の十日や愛しきやし  
わがままの出てきし春や刃物研ぐ  
滅びても光年を燃ゆ春の星  
けふ見たる桜の中に睡るなり  
暑ければ慾を半分捨てにけり

6  
8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 7 7 7 7 7 7 7 6 6 6 6 6 6 6  
3 2 1 1 1 1 1 0 0 9 8 5 4 4 3 2 2 0 9 7 6 5 4 2 2

|                                      |   |
|--------------------------------------|---|
| 天道虫草のあらしに堪へてをり                       | 6 |
| 死蟬のほつたらかしが消えにけり                      | 6 |
| 晴子亡く登四郎も居ず雲の秋                        | 6 |
| 死者とまだ訣れてをらず白木槿                       | 6 |
| 五歩に付く草虱とはたのもしき                       | 6 |
| 水の香と木の香かよへり雪催                        | 6 |
| 返り花人智のごとき危ふさに                        | 6 |
| 枯山はゆつくり来よと坐りをり                       | 6 |
| くしやみして面 <small>つら</small> 八方へ歪みけり    | 6 |
| 悉く人に名のある寒さかな                         | 6 |
| 京人參無垢 <small>あけ</small> の朱なり摺みてやる    | 6 |
| 厄介と言へば死ぬこと菫の花                        | 6 |
| 螢火 <small>けいくわ</small> 忌と呼ばむか晴子逝きたる日 | 6 |
| 一塊のででむし動くああさうか                       | 6 |
| ゆふぞらの白鷺のみち魂迎                         | 6 |
| 蛇の衣垂れをり誰のものでもなく                      | 6 |
| マクベスの科 <small>せりふ</small> 白がふつといなびかり | 6 |
| 軽くゐてかるき風吹く蜘蛛の秋                       | 6 |
| あめつちのくれなる消ゆる秋の暮                      | 6 |
| 今を在る者が愛弟子冬木の芽                        | 6 |
| 齡寒 <small>よはひ</small> くいつかこの世に不思議なく  | 6 |
| 大寒の一本の薔薇鳴りいづる                        | 6 |
| 春の雲精進もせで父想ふ                          | 6 |
| ぺしやんこの紙風船の時間かな                       | 7 |
| 皆がみな途方に暮れて葱坊主                        | 7 |
| 日の射して筍の穴いぢらしき                        | 7 |



大山<sup>だいせん</sup>や枯は怠惰の色ならず

木枯のひつたくり雲火の用心

連れ合うて来て木枯は個々の声

炉も廃れ天狗話も継ぎ手なし

幾つかは遺品とならむ冬帽子

初みくじ結ひし無数の指想ふ

文藝に修羅無くなりぬみやこ鳥

着尽くさぬ衣服の数や万愚節

春夕好きな言葉を呼びあつめ

天行のすこやかならず水草生ふ

蛇数分にこにことわが傍にゐし

木蓮の声なら判る気もすなり

無季

死ぬ朝は野にあかがねの鐘鳴らむ

われのみぬ所ところへ地虫出づ

7  
1  
5

7  
1  
5

7  
1  
5

7  
1  
5

7  
1  
5

7  
1  
7

7  
1  
7

7  
1  
8

7  
1  
8

7  
1  
9

7  
1  
9

7  
2  
0

7  
2  
0

『藤田湘子全句集』角川書店より

(※注…数字は掲載ページ)